

《翻刻》陽明文庫藏伝為相筆『古今和歌集』校合 清輔本勘物

舟見 一哉

陽明文庫には鎌倉時代後期頃に書写された『古今和歌集』二帖が蔵されている。冷泉為相を伝承筆者とする枅形本である。

一部の研究者にはその存在が知られており、はやく久曾神昇氏が『古今和歌集成立論 研究編』（風間書房、1960）に奥書を翻刻されている。しかし、その性格については特に論じられることはなかったようだ。

奥書によると、底本は定家本のうち「貞応元年六月十日書写本」である。現在までに知られている貞応元年六月十日書写本は、①大島雅太郎氏蔵本、②『弘文莊待賈古書目 第三号』掲載本、③『弘文莊待賈古書目 第十二号』掲載本、④宮内庁書陵部蔵桂宮本二十一代集本（四〇〇・一〇）、⑤蓬左文庫蔵本（一〇六・一四）の五本。このうち、①③は所在不明。④は校合奥書として残っているが本文には校合の跡がない。⑤は奥書のみが残欠本である。したがって現在確認できる貞応元年六月十日書写本の本文はこの陽明文庫蔵本のみであり、もって本書の価値が知られよう。しかし、さらに本書において注目される点は、書き入れられた注記である。それらは筆跡や墨色が異なり、おおよそ以下の五種類に分類できる。

（A）本文と同筆、本文と同時に書写（全巻にある）

- （B）本文と同筆、本文と別時に書写（全巻にある）
- （C）本文と同筆の朱筆、本文と別時に書写（全巻にある）
- （D）本文と別筆・室町期の校合（仮名序から巻六まで）
- （E）書き入れ時期不明のA・D以外の墨筆（全巻にある）

A筆は底本にあつた勘物、B筆は「貞応元年十一月定家本」の勘物を転記したものと考えられる。C筆は「貞応二年定家本」の勘物とよく対応するが、二条家流の注説と一致する特異な注記を有する。E筆はいずれとも別筆であり、仮名遣いの訂正や振り仮名などを施す。定家本やその享受を考えるうえでこれらには参看すべき点が多いのだが、底本文文の問題とともに別に論じることとし、本稿では残るD筆部分を取り上げたい。

浅田徹氏・五月女肇志氏 2001 「国文学研究資料館蔵マイクロフィルムによる古今和歌集奥書集成（三）」『調査研究報告22』が「巻六までは清輔本による校合がある」と指摘した、清輔本に基づく校合がD筆による書き入れに相当する。このD筆勘物が、清輔本のなかでも「永治二年本」から「仁平四年本」へと変化していく過渡期の姿を残す唯一の佚文であろうことについては、別稿で詳述した。ただし紙面の都合上、特徴的な勘物し

か取り上げることができず、本文の校合についても触れられなかったため、ここにD筆による書き入れの全てを翻刻する。

〔付記〕

末筆ながら、翻刻をご許可くださいました陽明文庫文庫長名和修氏に深謝いたします。

なお本稿は平成二二年度日本学術振興会科学研究費補助金・若手研究（B）課題番号 22720093 の研究成果の一部である。

(ふなみ かずや・神戸市立工業高等専門学校講師)